

## 発声発語障害学演習

《履修上の留意事項》この科目は1～15回を2グループに分けて、2名の各担当教員が同時開講します。

《担当者名》○永見慎輔 nagami@hoku-iryo-u.ac.jp 鈴木瑞恵

### 【概要】

発声発語障害の評価・介入に必要な知識・技術を、講義と演習を通して実践的に学ぶ。特に運動障害性構音障害に焦点を当て、問診から、口腔器官・神経学的検査、音響・聴覚的評価、コミュニケーション評価までを網羅的に扱い、評価結果の統合と解釈、介入計画立案、効果測定までを学ぶ。さらに、器質性構音障害（主に口蓋裂）の評価・介入についても理解する。演習では、PBLや症例検討、評価報告書・ケースレポート作成、相互評価などを通して、実践力と臨床的思考力を高め、言語聴覚士としての専門性を磨く。

### 【学修目標】

#### <一般目標>

言語聴覚士として、発声発語障害のある患者・対象者に対して、根拠に基づいた適切な評価及び介入を行うための基礎的な知識、技術、態度を修得する。評価・検査・観察から得られた情報を統合・解釈し、患者・対象者中心の支援計画を立案できる。

#### <行動目標>

発声発語器官の解剖学的構造と機能を理解し、患者・対象者の運動および形態的特徴を的確に観察、抽出し、医学的用語を用いて正確に記述できる。

発声発語障害に関連する神経学的検査の目的と手順を理解し、患者・対象者に適切な配慮を行いながら、正確に実施できる。

患者・対象者の発話特徴、音の誤り、明瞭度などを聴覚的に正確に評価し、その結果を言語学的・音響学的観点から分析・記述できる。

患者・対象者の表出・理解を含む言語能力、およびコミュニケーション能力（例：会話の様子、非言語的コミュニケーション）を多角的に評価し、得られた結果を分析し、コミュニケーションの特徴を記述できる。

各種検査、観察、および患者・対象者や家族との面談から得られた情報を統合し、エビデンスに基づいて解釈し、発声発語障害の病態や重症度、予後予測について考察できる。

典型的な所見を有する症例に対して、患者・対象者や家族のニーズを踏まえ、根拠に基づいた適切な介入目標と介入方針を立案し、他職種との連携の必要性を検討できる。

### 【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	オリエンテーション	発声発語障害学演習の全体像と学習目標の説明	永見慎輔 鈴木瑞恵
2 ) 5	運動障害性構音障害の評価	・運動障害性構音障害の病態と分類 ・評価の流れと問診の重要性 ・口腔器官の機能評価（解剖学的特徴と評価方法、観察ポイント、記述方法） ・神経学的検査	永見慎輔 鈴木瑞恵
6 ) 10	運動障害性構音障害の介入	・運動障害性構音障害の介入の全体像と治療原則 ・多職種連携によるチームアプローチの重要性と実際 ・EBPの考え方と介入への応用 ・介入計画立案のプロセス	永見慎輔 鈴木瑞恵
11 ) 13	器質性構音障害の評価と介入：口蓋裂を中心に	・口蓋裂の言語・発話評価 ・その他の器質性構音障害の評価と介入 ・口蓋裂に特有な音の誤りに対する介入方法	永見慎輔 鈴木瑞恵
14 ) 15	ケースレポート作成と発声発語障害学の未来を考える	・ケースレポートの作成演習 ・ケースレポートの相互評価（ピアレビュー） ・発声発語障害学の最新の研究動向	永見慎輔 鈴木瑞恵

### 【授業実施形態】

#### 面接授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学環、学校の授業実施方針による

### 【アクティブ・ラーニング】

導入している

【評価方法】

定期試験60%  
課題20%  
実技試験20%

【教科書】

西尾正輝 著 「ディサースリア 臨床標準テキスト 第2版」 医歯薬出版 2022年  
熊倉勇美 他 編 「標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版」 医学書院 2021年

【参考書】

廣瀬肇 他 著 「言語聴覚士のための運動障害性構音障害」 医歯薬出版 2011年  
館村卓 著 「口蓋帆・咽頭閉鎖不全 その病理・診断・治療」 医歯薬出版 2012年  
梶龍兒 編 「不随意運動の診断と治療 動画で学べる神経疾患 改訂第2版」 診断と治療社 2016年

【備考】

演習の授業は臨床的態度、評価、治療手技の習得の場であり、毎回、必ず出席することを前提としている。やむを得ず欠席する場合は、担当教員のメールアドレス宛てに事前に連絡し、対応方法について指示を受けること。音声、画像などの特殊教材を多用するので、受講方法に関する指示をよく確認すること。発声発語障害学1で使用した教科書、配付資料等を持参すること。

【学修の準備】

発声発語障害学1で使用した教科書、配付資料等をよく復習すること。(20分)科学的文章作成能力の向上に努めること。(20分)

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

(DP3) 言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。発声発語障害、特に主要なテーマである運動障害性構音障害と、関連する器質性構音障害（口蓋裂を含む）について、その病態、評価方法、介入方法に関する基礎的専門知識を講義形式で学ぶ。問診、口腔器官の機能評価、神経学的検査、音響分析、聴覚的評価、コミュニケーション評価といった各種検査・評価技術、および、それらに基づく介入技術を、演習を通して実践的に修得する。問題志向型学習、症例検討、評価報告書・ケースレポートの作成と相互評価などの演習を通して、得られた情報を科学的根拠に基づいて統合・解釈し、論理的に介入計画を立案し、その効果を検証する能力を養う。これらのプロセスを通じて、科学的思考に基づいた実践能力を涵養する。

【実務経験】

永見慎輔、鈴木瑞恵（言語聴覚士）

【実務経験を活かした教育内容】

医療機関のリハビリテーション科、および耳鼻咽喉科および形成外科での実務経験を活かし、発声発語器官の問題によるコミュニケーション障害に対するリハビリテーションの基本的知識の活用、評価および治療等に要する技術の習得を指導する。